

令和5年10月12日

南の風アジア競技会女子バスケット特集号

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

「いやあー、惜しかった！」 アジア競技会女子決勝戦、あと一步でした！！ 結果です。

CHN | 26 | 19 | 12 | 17 | = 74

JAN | 16 | 24 | 11 | 21 | = 72

読者の皆さんもテレビ放映をご覧になり、いろいろ感想をお持ちのことと思います。本号では、ゲーム展開を逐一迎えるのではなく、私を感じたことを書いて見ます。主観が入ることをご容赦ください。そして「いやあ、そこはこうだろう」と、ご批評いただければ幸いです。

立ち上がり、イーージーなパスミスやディフェンスのスイッチローテーションに遅れが重なり、7対7からランを作られ7対17となります。その後、互角の展開となり16対26で1Qが終了します。

2Qでも日本のディフェンスが、スイッチ、ローテーションで後手を踏み一時期、18対35と最大17点差をつけられました。ただ、そこから日本は、トランジションから走ったり、3Pシュートを決めたりして挽回します。2Q終了で、40対45と5点差まで詰めます。

前半を振り返ると、中国に45点はやられ過ぎたと感じました。原因は、スイッチのミスとローテーションの遅れです。特にスクリーンに対して、どの場合はスイッチで、どの場合はファイトオーバーもしくはスライド、ハードショーなのか迷う部分があったような気がします。また、ダブルチームからリカバリーするときのパスの読み、さらにエキストラパスへの対応が遅れてしまうことがありました。

中国のセンターのピックプレーや、ゴールカットからのポップアウトにつくことは簡単ではありません。対中国とのゲームになると、「5人の誰かを空けたらやられる」（もちろん戦術として、特定の選手に3Pシュートは仕方がないというのはあったと思います）ということになりますから、チームディフェンスは、コミュニケーション、読み、スピードを完璧にしなければならないので、メチャクチャたいへんだと思います。ここで、ゲームの流れを簡単に追います。特に4Qの同点後は詳しく見ていきます。

日本は、立ち上がりシュートが決まらず苦勞する。それでも、林、平下選手の3Pや高田、川井、宮崎選手のシュートで、前半をよく5点差にまとめる。

後半は、両チーム点数を伸ばせない中、日本は粘り強いディフェンスで中国に点数を与えず12点に抑え、最後に高田、宮崎選手の連続得点で51対57となる。

勝負の第4Qは、苦しい展開が続くが東藤選手がスコアを伸ばし、残り3分で川井選手のレイアップが決まり、65対65の同点とする。その後、再び中国にリードを許すが、**残り14秒の土壇場で林選手が起死回生の3Pシュートを沈め再び同点**。ここで中国がタイムアウト。フロントコートからスローインとなる。この**サイドラインからのフォーメーションプレーが勝負を決めるワンプレー**となる。

この場面を詳しく書きます。日本は4ファウルのためファウルはフリースローとなります。

残り時間13.8秒。 72対72同点。

リングに向かって、左のサイドラインからのスローイン。中国9番がスロアー、東藤選手がマッチアップ。中国の選手がフリースローラインに3人並ぶ《手前から5番、11番、14番（2m）》。4番がゴ下、宮崎選手がマッチアップ。まず、4番が5番、11番の間をカットしてボールを受ける。次の瞬間

5番が11番と14番の間をカットしてポップアウト。5番に付いていた林選手がやや遅れ後ろから追隨する形となる。14番がスクリーンを林選手に掛け、5番のポップアウトを助ける。5番は4番からパスを受け、右ウイングからドリブルシュートを決める。残り時間9秒。

日本はすかさず、宮崎選手からスローインのボールを受けた赤穂選手が左サイドラインを左手でボールをドリブルプッシュして一気にドリブルシュートを狙う。ゴール下に中国の2mの14番が待ち構えるが、チームファウルが4つのためファウルはできない。赤穂選手はダブルクラッチ気味に（ファウルを誘うため？）ゴールを狙うが、惜しくも外れて万事休す。《72対74》

残り13.8秒の場面をもう一度振り返ります。

日本はなぜ簡単なドリブルシュートを許してしまったのでしょうか。サイドラインから中国のスローインです。スロアーは9番、フリースローラインに手前から5番、11番、14番（2m）、そしてゴール下に4番という、アライメント。日本はファウルができない状況（4ファウル）です。

私がああ時点で考えた日本の対応は、14番にゴール近辺でシュートを打たれることを絶対避けることだと思いました。14番には高田選手がマッチアップしています。また、ピックから跳びこまれることも避けなければいけません。したがってペイントエリアをしっかりと守りたいのです。そのため、ペイントへのカットやダイブは絶対阻止しなければなりません。

ところが中国のフォーメーションは、日本の裏をかくものでした。普通なら14番（15番、2m11cm）はケガのためこの場面は出ていない）絡みのプレー（リバウンドまで想定した）で点を取りにいくのではと思います。試合後、中国のヘッドコーチは、「最後はこれまでやったことがないトリックプレーを使って勝負した」と語りました。

このあたりのベンチの駆け引きも、たいへん見応えがありました。正にベンチワーク対決です。ただ恩塚ヘッドは選手を信頼し、相手の動きから対応の判断を任せていたのではないのでしょうか。

林選手は試合後に、5番がポップアウトに行った時点で、「私が5番にスライドでディフェンスすれば良かったが、相手が本当に上手かった」と悔しがっていました。

また、あの場面で高田選手が5番にスイッチしてしまうと、14番にゴール下にダイブされるので、その選択も難しいです。画面では赤穂選手がヘルプに行こうとしましたが遅れてしまいました。あのプレーに関しては中国が日本を上回った感じがしました。

決められた後、切り替えて日本は赤穂選手がドリブルプッシュから得点を狙いました。この場面も駆け引きがありました。ゴール下で対応した、中国の14番もファウルができないので、手を上げるだけの対応でした。赤穂選手は試合後、「自分がボールプッシュすれば絶対抜けると思っていたのですが・・・普通に打ったんですけど、あの場面で決められなかったのはめちゃくちゃ悔しい、もっと練習します」と言いましたが、私は映像を見てダブルクラッチからファウルを狙う駆け引きを感じました。結果は外しましたがナイスチャレンジだったと思いました。本当に惜しかったです！！

試合後、林キャプテンは「足を止めずに自分たちのリズムでできたことは、『こういうことなんだな』と、恩塚さんのやりたいバスケが分かってきました」と語っていました。東京五輪後に進めて来た新しいスタイルに対し、手応えをつかみ始めているようでした。

恩塚ヘッドは「チームとしてそれぞれが役割を果たしてくれた。やるべきことがちゃんと理解できていて、誰が出てても自分の仕事ができるようになってきた」と語りました。**さあいよいよ、パリ五輪に向けて世界最終予選（来年2月）へ挑戦です！！ がんばれアカツキジャパン女子日本代表！！**